能登ライフ体験ツアー体験記

By Yoji Oita

マチ（都会）育ちの僕のような人間にとって、このようなツアーは地方の暮らしを知る貴重な機会だ。９月の三連休の２泊３日。参加することにした。

９月１５日。真夏のように眩しい快晴の朝８時半。金沢駅で集合した一行は小型バスに乗り込み、いざ出発。ツアー参加者は合計６名。案内役の「のとガール」は総勢５名。うち３名が全行程に同行してくれるという。何という手厚さ！　その３人とは、リーダーのあきさん、最初にツアーを発案したくみさん、そしてツアー中の節目節目で振り返りの議論をするときに進行役を担当するゆかさん。

ところで、複数なら「ガールズ」じゃないのか！？「ズ」はどこに行ったんだ！？・・・と心のなかでプチツッコミ（面と向かって言う度胸なし）。

能登島で農作業体験その１

能登半島の中ほどまで来たところで東海岸に抜け、橋を渡ると能登島だ。「のとじまファーム」に直行。かつて果樹園が耕作放棄地になっているところが多いとのこと。そうした土地を活用して新しい農業経営に取り組んでいる一つの例がこの農園。のとガールのなつえさんが我々を迎えてくれる。Ｉターンしたなつえさんは、商品開発の経験を生かしてこの農園のマネージャーを務めている。この人の経歴を聞くだけでも十分に興味深い。

行政の取り組みについても七尾市の担当者が説明してくれた。「世界農業遺産」に認定されたことを生かしつつ、一次産業を二次・三次産業と結びつける「六次産業化」を図っているという。

お昼になる。地元の食材が鏤められたお弁当をいただく。まるで宝箱だ。作ってくれた島育ちのおかあさんの話を聞く。すすきが風に揺れて「風流」だとか、軒先に吊るされた玉葱が「アート」だとか、自分たちには当たり前のことがマチから来た人たちには新鮮に眩しく映る。その反応がこんどは地元の人たちにとって新鮮だという。

食用のオクラの花。たくさんの食材がお弁当を彩る。

宝物がお腹に詰まった幸せを感じながら農作業体験を開始。我々に託された作業は、ブルーベリー畑のネット外し。実がなる時期には、鳥たちに食べられるのを防ぐために木々の上を網で覆うのだ。収穫期が終わると次の年まで巻き取っておく。炎天下に上を向いての野良仕事はキツい。マチの人間にとっては、その辛さを体で知ることに意味がある。

汗とクモの巣にまみれ作業完了。この畑のブルーベリーから作ったジュースを試飲。酸味が肉体労働後の身体には心地よい。これを１本３００円で販売しているとのこと。付加価値のある商品開発も六次産業化の一例といえるのだろうか。

漁村の暮らしぶり

のとじまファームを出発し、島の東側に進む。「えのめ」という名の漁港が次の訪問先。港で魚をさばく女性たちに出会う。売り物でなく、自分の家族や親戚たちで食べるための下ごしらえだそうだ。このあたりでは半農半漁がごく普通らしい。夜明け前（深夜）から漁に出て、陸に上がってからも田畑で仕事。なんというタフさであろうか。

この日の宿は「えのめ荘」。夕食は、海の幸を炉端で焼いてくれる。すべて絶品！

夕食後は公民館にお邪魔して、祭りの稽古を特別に見させてもらう。この時期、毎日のようにどこかで祭りが開かれているらしい。踊る獅子。弾む太鼓。光る汗。子供からじっちゃん世代まで。どの顔も輝いている。

長いけどあっという間の１日目が終わる。

珠洲の果樹園で農作業体験その２

２日目も朝から快晴。能登島を出発し、半島（本州）に戻る。立派な黒い瓦屋根の家々が立つ海岸線を北上し、能登半島の先端にある珠洲（すず）に向かう。「道の駅すずなり」でひと休み。道の駅の建物のすぐ横には廃線となった駅のプラットフォームが残されており、それを活用しての自分たちの作った野菜や果物などを直売している人たちもいた。明るい笑顔が迎えてくれる。道の駅も市場もそれぞれ地元のＮＰＯが運営しているそうで、元気な活動の例だろう。ここで合流したなほさんは、ツアー中の登場順ではトリを飾る５人目ののとガール。手作りのお菓子をここで販売しているそうだ。

このあと、珠洲市内の果樹園に行き農作業のお手伝い。ツアー中の農作業体験第２弾だ。経営者のご主人の指示を受ける。仕事の内容は、リンゴの実を包んでいた紙を剥ぐ、栗を拾う、梨の木に水をまく、など。暑いから適当に休みながらでいいよー、と気遣ってくれる。

木陰で休憩。もぎたての梨やリンゴをいただきながら話を聞く。薪のストーブや風呂を広めたいというご主人。資源が循環し、体は健康になり、高齢者も働ける。被災地への支援にもなるという仕組み作り。その中心にあるのが薪。

酒、料理、語り合い、すべてがごちそう

昼食をはさんでたっぷりお話を聞いたあと出発し、銭湯に立ち寄って汗を流す。それから、その日の宿となるゲストハウスに向かう。海辺の立つこの宿は素泊まりが基本で、自炊できるように大きな台所がある。なほさんの調理をみんなで手伝いながら夕食が完成。

彼女は料理の専門家としてかつて青年海外協力隊となった人。当然ながら作るものすべてがおいしい。手巻き寿司、さっきの果樹園でもらったキクラゲ入りのチャンプルーなど大ごちそう。地元の酒蔵の杜氏さんも参加してくれる。この人も協力隊 OB だ。差し入れてもらった酒は絶品。深夜まで語り合う。

２日目もこうして無事完了。

棚田で農作業体験その３

３日目の朝。再び快晴で朝日が強烈。朝食後にゲストハウスを出発。棚田での農作業体験をしにいく。傾斜地にひな壇のように連なる田んぼ。黄金色の稲穂がまぶしい。

炎天下の田んぼに入り、鎌の持ち方から手取り足取り教えてもらう。刈った稲をわらで束ねる。コツを教えてもらうがなかなか身に付かない。何十回目かにようやく流れる動作でうまくできるようになる。嬉しい。

田んぼの端のほうは手作業が必要だが、それ以外は

バインダーという機械の出番だ。刈った稲をすぐさま束ねてしまう優れモノ。シャクだけど人力ではまったくかなわない機械の力を見せつけられる。

続いて、束ねた稲を「はざ」にかける作業。束を二股の形に広げて、縦横に組まれた棒に載せていく。高いところは梯子に登る。下から稲の束を投げ上げてもらう。タイミングとコントロールが大切。慣れない我らとちがって、家族コンビだと息もぴったりだ。

受け入れてくれた農家の家族も素敵で、特にお父さんの笑顔と明るさが弾けていた。棚田でコメを作るのは大変だが、丁寧にやることで質がよく価値の高い商品にしようという取り組みを頑張っているようだ。これも貴重な訪問であった。

後で知ったのだが、この日の珠洲は最高気温 34.5 度。９月も半ば過ぎというのに猛烈な暑さであった。その響きと違って珠洲は全然涼しくなかった。そして、人のハートは気温以上にアツいぞ！

最後のメシと振りかえり

Ｉターンしたなほさんが借りて住んでいる家にお邪魔して昼食。スパイスの香り豊かなココナッツ・ミルクのカレーをいただく。もちろん美味！

食事が終わるとツアー全体の振りかえり。みんなで順番に感想を言う。この時間こそ、このツアーの特徴のひとつだ。単なる余暇でなく、考える旅だから。お互いに語り合うことで、自分の考えもはっきりしてくる。

午後３時に終了。名残惜しいが珠洲を発って金沢駅に向かう。その車中でも、「国際協力と地域づくり」の話や、それぞれの人のこれからの生き方についての深い会話が続く。心を開き合うのに、この３日間は十分な時間だった。

午後６時少し前に金沢駅に到着。３日間安全運転してくれた運転手さんたちに感謝。帰路を急ぐ人たちもいるので、余韻を楽しむ暇もなく別れを告げて解散。こうして能登ライフツアーは完結。

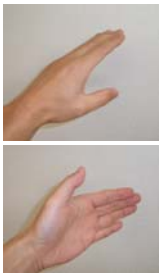
マチに戻って想うこと

ツアーから戻り、僕は再びマチの人になる。このツアーで何を感じたのか。自分のなかで何が変わったのか。答えはすぐに出ないだろう。無理に急ぐ必要はない。じっくり探せばよい。

今回のツアーには大満足だった。一体どこがよかったのだろう？　訪問先はどこも素晴らしかった。農作業体験や地元の人との対話の組み方も絶妙であった。３日間という時間のなかで、スカスカでも詰め込みすぎでもなく「ちょうどよい」密度のプログラムだった。みんなで話し合う時間も有意義だった。通算６回目なので、毎回工夫を重ねてきているのだろう。

最初は謎だったのとガール。どのような人たちなのか、ツアーを通して分かってきた。みな青年海外協力隊の OG で、能登にＩターン・U ターンして地域の活性化に尽力している。協力隊経験がなくても志があれば加入できるらしい。略すと「ＮＧ」になってしまうのとガール。が、実際はＮＧと正反対。ベリー・グッド。地元の活動を盛り上げるために、自ら前に出る覚悟をもったのだ。決して図に乗ったりしていない。そうか、だから「ズ」のない「のとガール」だったのか！素晴らしいぜ、のとガール（たち）！

（尾井田　羊路）



おまけ：地元の人たちは能登半島を左手で表現する。その方法は写真のとおり二通り。これらを使いこなせればすっかり能登通!?